

## 月と夢 青澤隆明(音楽評論)

「ルネ・マグリットの絵に影響されたんだ」とブルース・リウは言っていた。「シュールレアリスティックで、暗い夢が多くて、昼と夜がおなじ絵の中にあるような感じ」。

それで、ちょっと不思議なこのプログラムが着想された。「とても夢みがちで、月みたいなコンセプト」。かと言って、特にマグリットが好きというのでもなく、このコンセプトにより着想となっただけ、というところがまた彼らしい。さらりと軽妙な身のこなしだ。

月の光と言っても、さまざまな顔がある。幕開けに弾くリゲティの「ファンファーレ」には、「月へ行くような不条理の趣がある」とリウは言う。「月は私たちが思うような美しいものではなく、その実態は非常に奇妙でデコボコしたものです。月の映像を見れば、とてもミステリアスで、とても暗く、とても寒い。だから、この種の不条理さがリゲティから出てきて、《月光ソナタ》に転じて行くのは、とても素敵だと思う」。

その嬰ハ短調ソナタ《月光》からショパンのノクターンOp.27への繋がりもそうだが、作曲家が月に近づく

のに、#やbの多い調性を選んだのは、光のアングルからみてもっともなことだろう。プログラムを通じた調性の共鳴や変化もまた興をそそるものだ。月の光から始めて、やがてスペイン的な面へといたるが、その間にはトランジションがある。

スペインへの旅は、まずラヴェルの「道化師の朝の歌」で予見され、モンポウの「月の光」による2つの小品から、リストのラプソディへ進む道行きとなる。月の光と、スペインの色彩や舞踏。いずれも生きる者たちを照らす響きである。

そしてハ長調ソナタ《ワルトシュタイン》が加えられ、ベートーヴェンのソナタ2作が前後半に据えられたのは、2027年に来る作曲家の没後200年を見越したリウのチャレンジだろうか。その前には、ドビュッシーの「夢」がみられる。

一見、不合理にみえることにも、よくよくみれば意味はある。奇妙で気まぐれにもみえるこの「月への旅」は、いったいどこに着地していくのか。ブルース・リウのやわらかな感性と明敏な演奏技巧が、いずれ鮮やかに照らし出すだろう。そこには、きっと驚きと喜びがある。

## ブルース・リウ(ピアノ) Bruce Liu, Piano

2021年第18回ショパン国際ピアノ・コンクール優勝。

2024年ラインガウ音楽祭のフォーカス・アーティストとして、リサイタル、室内楽、そしてフランクフルト放響、ドイツ・カンマーフィル、チューリッヒ・トーンハレ管との共演と全5公演に出演。2024/25年シーズンは、ルクセンブルク・フィルとグスターボ・ヒメノ、ロンドン響とサー・アントニオ・パッパーノ、フランクフルト放響とアラン・アルティノグル、ウィーン響とマリー・ジャコ、ロッテルダム・フィルとラハフ・シャニ、タンゲルウッド音楽祭でのボストン響、デンマーク国立響、ケルン放響、シンシナティ響などと共演。これまでに、ロサンゼルス・フィル、サンフランシスコ響、フィラデルフィア管、モントリオール響、フィルハーモニア管、NHK響などの主要オーケストラと、ライアン・バンクロフト、チョン・ミョンフン、パーヴォ・ヤルヴィ、ファビオ・ルイーダ、ヨアナ・マルヴィッツ、サントゥ・マティアス・ロウヴァリ、ヤニック・ネゼ＝セガン、ジャンドレア・ノセダなど著名な指揮者と共演した。

リサイタルではこれまでに、ブリュッセルのボザール、ウイグモアホール、フィルハーモニー・ド・パリ、東京オペラシティなどに出演。2024/25年シーズンには、カーネギーホール、シャンゼリゼ劇場、アムステルダム・コンサートヘボウなどで再演するほか、ウィーン楽友協会、ミュンヘン・プリンツレーゲンテン劇場でデビュー予定。

ドイツ・グラモフォンの専属録音アーティスト。